

認識人間学Ⅱ

試験のヒント

1. 言語論的転回について
2. 理想言語哲学について
3. 日常言語哲学について
4. サールの言語行為論概観
5. 指示理論とは

試験のポイントは主に確実に知識を覚えること

哲学者の名前であったり、彼らの著書、立場などの基礎的な知識がテストに出てくる。(多少記述あり)

1. 言語論的転回について

言語論的転回

この言葉を初めて使用したのがグスターフ・ベルクマンであった。
彼の著書の中には以下のように書かれている

「最近哲学は言語論的転回を行った。…（中略）…。三人の人たち、ムーア、ラッセル、ヴィトゲンシュタインの影響は際立っている。」

その後この「言語論的転回 (linguistic turn)」という言葉の世界へ広めたのがリチャード・ローティであった。

彼の論文集『言語論的転回』には「言語論的哲学」（言語論的転回に基づく哲学）について次のように書かれている。

「哲学的問題は、言語を改良し、あるいは、今使用している言語をよりいっそう理解することによって、解決（もしくは解消）される問題である」

また言語論的転回の担い手であるヴィトゲンシュタインはその著書『論理哲学論考』において次のように書いている。

「この本は思考に限界線を引く、いやむしろ思考ではなく思考の表現に限界線を引く」

ここでいう思考の表現とは言語のことだといえる。

このようにラッセル、ムーア、ヴィトゲンシュタインによる三人の哲学的営みをベルクマン、ローティは言語論的転回と表現したのであった。

2.理想言語哲学

論理実証主義

オーストリアのウィーンの哲学者たちによるウィーン学団などでは、数学が記述命題ではないことに着眼し、さらに検証可能な命題以外は有意でないという主張をもとにして、有意な命題は自然科学に属すると主張する。そして『論理哲学論考』の主張に従い、従来の哲学における形而上学を追放し、日常言語の曖昧さを廃して完全な人工言語の創案に邁進するという人工言語学派を開いた。それにより、自然科学的諸命題の性質に基づく世界観を構築しようとした。『論理哲学論考』が命題の意味に関連して事実との一致不一致に基づき、真偽判定可能な命題を有意命題としたのに対し、論理実証主義たちは検証可能／不可能という概念に基づき、「検証可能な命題＝自然科学によって判定される命題＝有意な命題、検証不可能な命題＝擬似命題＝除去されるべき命題」という二分法を導入した。それにより、科学とは検証可能な諸命題の総体である、と主張する言語哲学に基づく科学観を形成した。

論理的原子論

すべての命題は、それ以上分解できない単純な原子命題（要素命題）から論理的に構成されたものである、とする哲学的主張。原子命題は原子事実を表現する。ラッセルおよび前期ウィットゲンシュタインによって展開された。

真理値…論理学の用語で、ある命題について、命題の内容が真であるかどうかを表す値のこと
あと真理値表なども確認しておく

3. 日常言語哲学

- ・ギルバート・ライル

著書『心の概念』

「人間は心と体を持っている」

→これはカテゴリー・ミステイクである

カテゴリーミステイク

…例えば「大学」を例にとる。大学というのは図書館、校舎、食堂などによって構成されたものでありある一つの建物を指しているわけではない。もし大学を建物として考えてしまうと図書館、校舎、食堂と並列して大学というものが立ち並んでいることとなる。つまり大学を誤ったカテゴリーに入れてしまっているということとなる。これがカテゴリーミステイクである。

ここでなぜ「人間は心と体を持っている」がカテゴリーミステイクなのか？

→例えば「嬉しい」というような心の在り方を表す言葉を考える。この「嬉しい」というような感情は私的なもの（直接的にはその人にしかわからないもの）であるが、「あの人なんだか嬉しそう」というように我々は他人の心の在り方を感じることもある。なぜそう感じるのかというと、例えば笑っているから、スキップしているからなどその人の身体的あり方（これ自体は公共的）を見たためであろう。

つまり我々は人の身体の振る舞いを見て心の在り様を捉えている。

→じゃあそもそも心なんてあるのかという結論に至る。

身体の中に心も含まれるのに身体と心を分けて考えるのはカテゴリーミステイクである（論理的行動主義）

- ・ヴィトゲンシュタイン（後期の思想）

著書『哲学探究』

私的言語の否定

私的言語…自分にしかわからないものを表す言語

他人には理解できない言語

しかし彼は私的言語など存在しないと否定する。

それは我々が言語習得をする際、外的要因によりなされるからである。

例) 誰かが人のケガを見て「痛そう」と発言したとき、「ああ、これを痛いって言うんだな」と理解する

・ジョン・ラングショー・オースティン

著書『言語と行為』

彼は言語使用について二つのタイプに分類した

* 叙述的

言明、表現など事実や事態などを述べたもの

「今日は晴れた」

* 行為遂行的

許可、依頼など事実確認したりするものではないもの

「窓を開けてください」

しかしながらどちらにしろ言葉を発言することによって事実確認したり依頼したり、何らかの行為を行っている。この言語行為を彼は主張した。

・ジョン・サール

次の項で詳しく説明

4. サールの言語行為論

・ジョン・サール

著書『言語行為』

サールは以下のようなことを考えた

☆発話行為

・発話内行為

言葉を発した時点で行われる行為

例) 約束、謝罪など

・発話媒介行為

発話によってもたらされるような行為

例) 説得、脅迫など

☆命題行為

「サムはタバコを吸う」

「サムはタバコを吸うか」

「サム、タバコを吸え」

以上の3つの文章は「サム」という対象を指示して（指示行為）、
「タバコを吸う」ということを述定している（述定行為）。この指示
行為と述定行為を合わせたものを命題行為というが、それぞれの文
章の命題内容は同じであるのに、明らかに発話内行為は異なってい
る。これを「発話内の力」という。

☆発話内行為の条件と規則

サールは言語使用は規則に支配された行動と考え、発話内行為に
おける行為をなすための諸条件から語や文などの使用規則を導き出
そうとした。

☆発話内行為の分類

発話内行為の分類	例
信念表明型	言明、主張
行為指令型	命令、依頼
行為高速型	約束、誓約
心情表明型	感謝、謝罪
宣言型	審判の発言

これらの分類は発話内目的や言葉と世界の適合方向によって分類され
る。

5.指示理論とは

①指示理論へ向けて

- ・ジョン・スチュアート・ミル

著書『論理学体系』

固有名には意味がないと主張した。

- ・ゴットロープ・フレーゲ

論文『意味と指示について』において固有名には意味があると説明している。ここでいう意味とはその対象物がどのようなものであるかというもの

→記述そのもの

- ・ラッセル

1918年、講演会において「固有名は記述を短くしたものである」と主張

②伝統的指示理論

言葉の記述内容に当てはまるものがその言葉の指示対象となるという原則からなる理論

記述が対象を決定するという記述主義の立場に基づく

記述の中でももはや指示対象が確定可能となるほどの詳しい記述のことを同定記述という

記述…指示対象がどのようなものであるかを表すようなもの

例) エベレスト→「世界一高い山」

松本紘→「京都大学の元総長」

③伝統的指示理論批判

- ・キース・ドネラン

批判内容

自分が話そうとしている指示対象を聞き手が選び出すのに都合のよい記述を用いて対象を指示してやることもできるのではないのか？

例) 「あのマティーニを飲んでいる人」

話し手と聞き手が酒場において、いままさにグラスを片手にマティーニを飲んでいる人がいるとする。その場合聞き手は上の発言における指示対象がその人物であると理解するだろう。しかし本当はその人のグラスに入っているものがマティーニではなく水だった場合どうであろう。おそらく聞き手はそれでも指示対象はその人物のことであるとわかるであろう。このように記述が適合していなくても聞き手の注意をその人に向けることができれば、指示に成功したことになる。

・ソール・クリプキ

批判内容

ゲーデルを同定するために「不完全性定理を証明した人」という記述を使ったとする。しかし本当は不完全性定理を証明した人はゲーデルでなくシュミットであるとしたらゲーデルという名前でシュミットを指示したこととなる。これはおかしいのではないか？

クリプキの主張

☆指示の固定性

クリプキは、固有名は固定指示子であるという。固定指示子とは特定の対象を、その対象が存在する限り常に支持する表現のことである。例えばニクソンは大統領であったとしてもなかったとしてもニクソンであることに変わりはない。

クリプキに言わせると伝統的指示理論では固有名を記述に置き換えてその特徴を捉えようとしており、固有名の固定性という特徴を捉えていないということになる。これも彼の伝統的指示理論批判の一部となっている。

☆指示の因果説

ある対象を指示するのに同定するに足る記述を持っている必要はない。例えばAという対象を「アリストテレス」とする命名儀式がとりおこなわれると、その対象Aの名は人から人へと受け渡されていく。そしてある人がAを指示するときに記述を用いることなく「アリストテレス」という言葉を使えばAを指示したことになる。なぜならそのルーツをたどっていけばその指示する対象がAにまで到達するからである。

⑤サールの反論

ジョン・サール

1958 論文にて記述は選言であると述べる

選言…命題と命題を「あるいは」「または」に相当する記号で結合する仕方

☆クラスター説

ある指示対象に対する無数の記述が存在する

例) アリストテレス→「アレキサンダー大王の家庭教師」

「プラトンの弟子」

「古代ギリシアの哲学者」

このクラスター説を用いてクリプキやドネランの批判に反論していった。